

# 妖術

泉鏡花

青空文庫



むらむらと四辺あたりを包んだ。鼠色の雲の中へ、すつきり浮出したように、薄化粧の艶えんな姿で、電車の中から、颯さつと硝子戸がらすどを抜けて、運転手台に頭あわられた、若い女の扮装みなりと持物で、大略あらましその日の天気模様けいもようが察さしられる。

日中ひなかは梅の香も女の袖そでも、ほんのりと暖かく、襟巻えりまきではちと逆さか上ぼせるくらいだけれど、晩になると、柳の風に、黒髪くろかみがひやひやと身に染む頃。もうちと経たつと、花曇りという空そら合あいながら、まだどうやら冬の余波なごりがありそうで、ただこう薄暗うすい中うちはさもない

が、処を定めず、時々墨流しのように乱れかかつて、雲に雲が累なる、ちらちら白いものでも交りそうな氣勢がする。……両三日。

今朝は麗かに晴れて、この分なら上野の彼岸桜も、うっかり咲きそうなどという、午頃から、急に吹出して、随分風立ったのが未だに止まぬ。午後の四時頃。

今しがた一時、大路が霞に包まれたようになって、洋傘はびしよびしよする……番傘には雫もしなく、俵の母衣は照々と艶を持つほど、颯と一雨掛った後で。

大空のどこか、吻と呼吸を吐く状に吹散らして、雲切れがした様子は、そのまま晴上りそうに見えるが、淡く濡れた日脚の根が

定まらず、ふわふわきまぐ気紛れに暗くなるから……また直きに降つて来そうにも思われる。

すっかり雨支度あまじたくでいるのもあるし、雪駄せったでばたばたと通るのもある。傘からかさを拵おろげて大きく肩にかけたのが、伊達だてに行届いた姿見よがしに、大薩摩おおざつまで押して行くゆくと、すぼめて、軽く手に提げたのは、しよんぼり濡れたも好いいものを、と小唄で澄まして来る。皆足どりの、忙せわしそうに見えないのが、水を打った花道で、何となく春らしい。

電車のちよつと停とまったのは、日本橋通三丁目の赤い柱で。

今言つたその運転手台へ、鮮麗あざやかに出た女は、南部の表つき、薄形こまげたの駒下駄こまげたに、ちらりとかかった雪の足袋、紅羽二重こうはぶたえの褌つまさば捌

き、柳の腰に靡なびく、と一段軽く踏んで下りようとした。

コオトは着ないで、手に、紺蛇目傘こんじゃのめの細々と艶のあるを軽く持つ。

ちようど、そこに立って、電車を待合わせていたのが、舟崎ふなざきという私の知己ちかづき——それから聞いたのをここに記す。

舟崎は名を一帆かずほといって、その辺のある保険会社のちよつとい顔で勤めているのが、表向は社用につき一軒廻って帰る分。その実は昨夜ゆうべの酒を持越しのため、四時びけの処を待兼ねて、ちと早めに出た処、いささか懷中に心得あり。

一 旦家いったんうちへ帰ってから出直してもよし、直ぐに出掛けても怪しゆうはあらず、またと……誰か誘おうかなどと、不ふり了り簡けんを廻めぐら

しながら、いつも乗って帰る処は忘れないで、件の三丁目にくだんにたたずつ、時々、一粒ぐらいぼつりと落ちるのを、洋傘こうもりの用意もな  
いに、気にもしないで、来るものは拒まず……去るものは追わず  
の気構え。上野行、浅草行、五六台も遣過やりすごして、硝子戸越がらすどごしに  
西洋小間こまものを覗く人を透かしたり、横町へ曲るものを見送つた  
り、頻しきりに謀叛氣むほんぎを起していた。

処へ……

一目その艶えんなのを見ると、なぜか、氣疾きばやに、ずかずかと飛着い  
て、下りる女とは反対の、車掌台の方から、……早や動出うごきだす、  
鉄の棒をぐいと握つて、ひらりと乗ると、澄まして入つた。が、  
何のためにそうしたか、自分でもよくは分らぬ。

そこにぼんやりと立った状を、女に見られまいと思つた見栄か、それとも、その女を待合わしてでもいたように四辺あたりの人に見らるるのを憚はばかつたか。……しかし、実はどちらでもなかつた、と渠かれは云う。

乗合いは随分立籠たてこんだが、どこかに、空席は、と思う目が、まづ何より前に映さきつたのは、まだ前側から下りないで、横顔も襟も、すつきりと硝子戸越に透通る、運転手台の婀娜あだすがた姿。

## 二

誰も知つた通り、この三丁目、中橋なかばしなどは、通とおりの中なかでも相あいの



宿しゆくで、電車の出入ではいりが余り混雑せぬ。

停とまった時、二人三人は他ほかにも降りたのがあつたらう。けれども、女に氣を取られてそれにはちつとも氣がつかぬ。

乗つたのは、どの口からも一帆一人。

入るともう、直ぐにぐいと出る。

卜前の硝子戸がらすどを外から開けて、その女が、何と！

姿見から影ぬげだを拔出したような風情で、引返して、車内へ入つて来たらうではないか。

そして、ぱつちりした、霑うるみのある、涼しい目を、心持俯目ふしめながら、大きく睜みひらいて、こつちに立つた一帆の顔を、向うから熟じつと見た。

見た、と思うと、今立った旧もとの席が、それなり空いていたらしい。そこへ入つて、ごたごたした乗客の中へ島田が隠れた。

その女は、丈長たけなが掛けて、銀の平打うしろの後ざし、それ者しゃも生粹きつすい

と見える服装みなりには似ない、お邸やしきごの好みの、鬢水びんみずもたらたらと

漆のように艶つややかな高島田で、強くそれが目に着いたので、くす

んだお召縮緬めしちりめんも、なぜか紫の俤おもかげだ立つ。

空すいた処が一つあつたが、女の坐つたのと同おんなじがわ一側で、一帆は

ちと慌あわただしいまで、急いで腰を落した。

胸、肩を揃えて、ひしと詰込んだ一列の乗客のりてに隠れて、内証で

前へ乗出しても、もう女の爪つまさき先も見えなかつたが、一目見られ

た瞳ひとみの力は、刻み込まれたか、と鮮麗あざやかに胸に描かれて、白木屋

の店頭みせさきに、つつじが急流に燃ゆるような友染ゆうぜんの長襦袢ながじゆばんのか  
 かつたのも、その女が向うへ飛んで、逆さかさにまた硝子越がらすごしに、扱帯しごき  
 を解いた乱姿みだれすがたで、こちらを差覗さしのぞいているかと疑う。

やがて、心着くと標示しるしは萌黄もえぎで、この電車は浅草行。

一帆すまいがその住居へ志すには、上野へ乗つて、須田町あたりで乗  
 換えなければならなかつたに、つい本町の角をあれなり曲つて、  
 浅草橋へ出ても、まだうかうか。

もつとも、わざととはなしに、一帳場ひとつちようばごとに気を注つけたが、  
 女の下りた様子はない。

で、そこまで行くゆくと、途中は厩橋うまやばし、蔵前くらまえでも、駒形こまがた  
 も下りないで、きつと雷門まで、一緒に行くゆくように信じられた。

何だろう、髪のかかりが芸者でない。が、爪つまはずれが堅気かたぎと見えぬ。——何だろう。

とそんな事。……中に人の数を夾はさんだばかり、つい同じ車に居るものを、一ひと年、半年、立続けに、こんがらかった苦勞でもした中のように種いろいろ々な事を思う。また雲が濃く、大空に乱れ流れて、硝子窓がらすまどの薄暗くなつて来たのさえ、確しかとは心着かぬ。

が、蔵前を通る、あの名代なだいの大煙突から、黒い山のように吹出す煙が、渦巻きかかつて電車に崩るるか、と思うまで凄すさまじく暗くなつた。

頸えりもと許ゆるがふと気になると、尾を曳ひいて、ばらばらと玉が走る。窓の硝子を透すかして、雫しずくのその、ひやりと冷たく身に染むのを知つ

ても、雨とは思わぬほど、實際上うわの空でいたのであった。

さあ、浅草へ行くゆと、雷門が、鳴出したほどなその騒動さわぎ。

どさどさ打ぶちまけるように雪崩なだれて総立ちに電車を出る、乗合のりあい

のあわただしさより、仲見世なかみせは、どつと音のするばかり、一面の

薄墨へ、色を飛ばした男女なんによの姿。

風立つ中を群むらつて、颯さつと大幅に境内から、広小路へ散りかかる。

きちがい日び和よりの俄にわか雨あめに、風より群集が狂うのである。

その紛れに、女の姿は見えなくなった。

電車の内はからりとして、水に沈んだ硝子がらす函ばこ、車掌と運転手

は雨にあたかも潜水夫の風情に見えて、束つかの間まは塵ちりも留めず、――

――外の人の混雑は、鯨しやちに追われたような中に。――

一帆は誰よりも後おくれて下りた。もう一人も残らないから、女も出たには違いない。

## 三

が、拍子抜けのした事は夥おびただ多しい。

ストンと溝へ落ちたような心持ちで、電車を下りると、大粒ではないが、引ひつつ包むように細かく降ふりかか懸る雨を、中なかおれ折で弾はじく精もない。

鼠の鰐つばをぐつたりとしながら、我慢に、吾妻橋の方も、本願寺の方も見返らないで、ここを的あてに來たように、素直まっすぐに広小路を

切つて、仁王門を真正面まつしようめん。

濡れても判明はつきりと白い、処々むらむらと斑ふが立つて、雨の色が、  
 花簪はなかんざし、箱狭子はこせこ、輪珠数わじゆずなどが落ちた形になつて、人出の混雑  
 を思わせる、仲見世の敷石にかかつて、傍目わきめも触ふらないで、御堂みじう  
 の方かたへ。

そこらの豆屋で、豆をばちばちと焼くにおい匂が、雨を蒸して、暖か  
 く顔を包む。

その時、広小路で、電車の口から颯さつと打った網すその末が一度、混  
 雑の波に消えて、やがて、向むきのかわた仲見世へ、手元を細くす  
 らすらと手繰寄せられた体ていに、前刻さつきの女が、肩を落して、雪かと  
 思う襟脚細く、紺蛇目傘こんじやのめを、姿の柳ひっかに引掛けて、艶つややかにさしな

がら、駒下駄を軽く、褌つまをはらはらとちと急いで来た。

と見ると、左側から猶たぬ予らわらないで、真中まんなかへ衝つと寄つて、一帆に肩を並べたのである。

なよやかな白い手を、半ば露頭あらわに、飜然ひらりと友染の袖を搦からめて、紺蛇目傘をさしかけながら、

「貴下あなた、濡れますわ。」

と言う。瞳が、動いて莞爾にっこり。留南奇とめきの薫かおりが陽炎かげろうのような糠ぬ雨かあめにしつとり籠こもつて、傘からかさが透通とおとるか、と近増ちかまさりの美しさ。

一帆の濡れた額は快よい汗になって、

「いいえ、構わない、私は。」

と言つた、がこれは心から素気そっけのない意味ではなかつた。



「だって、召物が。」

「何、外套がいとうを着ています。」

と別に何の知己ちかづきでもない女に、言葉を交わすのを、不思議とも思わないで、こうして二言三言、云う中うちにも、つい、さしかけられたままで五足六足いつあしむあし。花の枝を手に提げて、片袖重いような心持で、同じ傘からかさの中を歩行あるいた。

「人が見ます。」

どうして見るどころか、人脚の流るる中を、美しいしづきを立てるばかり、仲店前を逆らって御堂の路みちへ上るのである。

また、誰が見ないまでも、本堂からは、門をうろ抜けの見透みとおし一筋、お宮様でないのがまだしも、鏡があると、歴ありあり然ともう映

ろう。

「御迷惑？」

と察したように低声こごえで言ったのが、なお色めいたが、ちつと蛇じ目傘やのめを傾けた。

目隠しなんと除とれたかと、はつきりした心持で、

「迷惑どころじゃ……しかし穩おだやかではありません。一人ものが随分通ります。」

とやつと苦笑した。

「では、別ツこに……」と云うなり、拗すねた風にするりと離れた。

と思うと、袖を斜せなめに、ちよつと隠れた状さまに、一帆の方へ蛇目傘ほっそながら細りした背せなを見せて、その絵草紙屋の店を覗ながめた。け

ばけばしく彩った種々の千代紙が、染むがごとく雨に纏れて、  
 中でも紅が来て、女の脛をほんのりとさせたのである。

今度は、一帆の方がその傍へ寄るようにして、  
 「どっちへいらっしやる。」

「私?……」

と傘の柄に、左手を添えた。それが重いもののように、姿が撓  
 った。

「どこへでも。」

これを聞棄てに、今は、ゆつくりと歩行き出したが、雨がふわ  
 ふわと思いのまま軽い風に浮立つ中に、どうやら足許もふらふ  
 らとなる。

## 四

門の下で、後を振返つて見た時は、何店へか寄つたか、傍へ外れたか。仲見世の人通りは雨の臙おぼろに、ちらほらとより無かつたのに、女の姿は見えなかつた。

それきり逢あわぬ、とは心の裡うちに思わないながら、一帆は急に寂しくなつた。

妙に心も更あらたまつて、しばらく何事も忘れて、御堂みでうの階段を……あの大提灯おおちようちんの下を小さく上つて、巖おごそかな廂ひさしを……欄干らんかんに添つて、廻廊かいりやうを左へ、角の擬宝珠ぎぼしゆで留まつて、何やら吻ほっと一息ついて、

しづく  
 零するまでもないが、しつとりとする帽子を脱いで、額を手布  
 で、ぐい、と拭ぬぐった。

「素面しらふだからな。」

と歎息するように独ひとりごと言いして、扱しごいて片頬かたほを撫なでた手をその  
 まま、欄干ひじに肱ひじをついて、遍あまねく境内をずらりと視ながめた。

早いもので、もう番傘の懐ふところ手、高足駄で悠々と歩ある行くのが

ある。……そうかと思うと、今になって一目散に駆出すのがある。

心は種いろいろ々な処へ、これから奥は、御堂の背後うしろ、世間の裏へ入る

場所なれば、何の卑ひきよう怯おそな、相合傘あいがさに後おくれは取らぬ、と肩そびの聳

ゆるまで一人で気競きおうと、雨も霞かすんで、ヒヤヒヤと頬ほおに触る。一

雫も酔覚よいざめの水らしく、ぞくぞくと快く胸が時めく……

が、見透しのどこへも、女の姿は近づかぬ。

「馬鹿な、それつきりか。いや、そうだろう。」

と打棄り放す。

大提灯にはたはたと翼の音して、雲は暗いが、紫の棟の蔭、天女も籠る廂から、鳩が二三羽、衝と出て飜々と、早や晴れかかる銀杏の梢を矢大臣門の屋根へ飛んだ。

胸を反らして空模様を仰ぐ、豆売りのお婆の前を、内端な足取り、裳を細く、蛇目傘をやや前下りに、すらすらと撫肩の細いは……確に。

スーと傘をすぼめて、手洗鉢へ寄つた時は、衣服の色が、美しく湛えた水に映るか、とこの欄干から遥かな心に見て取られた。

……折からその道筋には、くだん件の女ただ一人で。

水色の手巾ハンケチを、はらりと媚なまめかしく口にくわに啣えた時、肩越に、振

仰いで、ちよいと廻廊の方かたを見上げた。

のめのめとそこに待っていたのが、了りようけん簡の余り透く気がし

て、見られた拍子に、ふらりと動いて、背後うしろ向きに横へ廻る。

パツパツと田舎の親仁おやしが、掌てのひらへ吸殻を転がして、煙管きせるにズース

ーと脂やにの音。くく、とどこかで鳩の声。茜あかねの姉も三四人、鬱金うこんの

婆様ばさまに、菜畠なばたけの阿媽かかあも交まじつて、どれも口を開けていた。

が、あ、と押魂おつたまげ消て、ばらりと退のくと、その横手の開戸ひらきど

口ぐちから、艶麗あでやかなのが、すうと出た。

本堂へ詣まいったのが、一廻りして、一帆の前に頭あちわれたのである。

すぼめた蛇目傘じやのめに手を隠して、

「お待ちなすつて？」

また、ほんのりと花の薫かおり。

「何、ちつとも。……ゆつくりお参詣まいりをなされれば可い。」

「貴下あなたこそ、前さきへいらしつてお待ち下されば可ようござんすのに、出張でっぱりにいらしつて、沫しぶきが冷つめたいではありませんか。」

さつさと先ゆへ行けではない。待つてくれれば、と云う、その待つのはどこか、約束も何もしないが、もうこうなつては、度胸すわが据すわつて、

「だつて雨を潜くぐつて、一人でびしょびしょ歩ある行けますか。」

「でも、その方がお好すきな癖すきに……」



と云つて、肩でわざとらしくない嬌態しなをしながら、片手でちよ  
いと帯おびを圧おさえた。ぱちん留どめが少し摺ずつて、……薄うすいが膨ふりとおる  
胸むねを、緋鹿子ひがのこの下こ々々《したじめ》が、八ツ口から溢こぼれたように打  
合わせの縷しゆす子を覗のぞく。

その間に、きりりと挟くわんだ、煙管筒きせるづつ？ ではない。象牙骨ぞうげぼね  
の女扇おんなあふぎを挿さしている。

今いま圧おさえた手ては、帯おびが弛ゆるんだのではなく、その扇子あふぎを、一息探しらく  
挿さ込んだらしかつた。

## 五

紫の矢<sup>やがすり</sup>緋<sup>はこせこ</sup>に箱<sup>はこ</sup>迫<sup>せこ</sup>の銀のぴらぴらというなら知らず、<sup>やみざく</sup>闇

桜<sup>ら</sup>とか聞く、暗いなかにフト忘れたように<sup>うすくれない</sup>薄<sup>うす</sup>紅<sup>くれない</sup>のちらちら

する<sup>すご</sup>凄<sup>すご</sup>い好みに、その高島田も似なければ、薄い駒下駄<sup>こんじや</sup>に紺蛇目

傘<sup>のめ</sup>も肖<sup>そく</sup>わない。が、それは天気模様で、まあ分る。けれども、今

時分、扇子<sup>おうぎ</sup>は余りお儀式過ぎる。……踊<sup>う</sup>の稽古<sup>けいこ</sup>の帰途<sup>かえり</sup>なら、相応

したのがあるうものを、初手<sup>しよて</sup>から素性のおかしいのが、これで愈<sup>い</sup>

々<sup>よいよ</sup>不思議になった。

が、それもその筈<sup>はず</sup>、あとで身<sup>み</sup>上<sup>じやう</sup>を聞くと、芸人だと言う。芸

人も芸人、娘<sup>むすめ</sup>手品<sup>てしな</sup>、と云うのであった。

思い懸<sup>あ</sup>げず、余<sup>あ</sup>り変<sup>あ</sup>つてはいたけれども、当人の女<sup>な</sup>の名<sup>な</sup>告<sup>あ</sup>るも

のを、怪しいの、疑<sup>う</sup>わしいの、嘘<sup>うそ</sup>言<sup>い</sup>だ、と云った処で仕方がない。

まさか、とは考えるが、さて人の稼業である。此方から推着けに、あれそれとも極められないから、とにかく、不承々に、そうか、と一帆の領いたのは、しかし観世音の廻廊の欄干に、立並んだ時ではない。御堂の裏、田圃の大金の、とある数寄屋造りの四畳半に、膳を並べて差向った折からで。……

もつとも事のそこへ運んだまでに、いささか気になる道行の途中がある。

一帆は既に、御堂の上で、その女に、大形の紙幣を一枚、紙入から抜取られていたのであった。

やっぱり練磨の手術であろう。

その時、扇子を手で圧えて、貴下は一人で歩行く方が、

「……お好きな癖に……」

とそう云うから、一帆は肩を揺ゆつて、

「こうなつちやもう構かまやしません。是非相合傘あひあひにして頂く。」と  
威おどすように云つて笑つた。

「まあ、駄だ々だ児このようだね。」

と莞にっこり爾りして、

「貴方あなた、」と少し改まる。

「え。」

「あの、少々お持合わせがござんすか。」

と澄すまして言う。一帆はいささか覚悟かくごはしていた。

「ああ。」

とわざと鷹揚おうように、

「幾いくら干ばかり。」

「十枚。」

と胸を素直まっすぐにした、が、またその姿も佳よかった。

「ちよいと、買物がしたいんですから。」

「お持ちなさい。」

この時、一帆は背後うしろに立った田舎ものの方を振向いた。皆みんな、き

よろきよろりと視ながめた。

女は、帯にも突つっこ込まず、一枚掌たなそこに入れたまま、黙って、一帆に

擦すれちが違ちがって、角の擬宝珠ぎぼしゆを廻まわって、本堂正面の階段の方へ見えな

くなる。

大方、仲見世へ引返したのであろう、買物をするといえば。

さて何をするか、手間の取れる事一通りでない。

煙草たばこももう吸い飽きて、拱こまぬいてもだらしなく、ぐったりと解け

る腕組みを仕直し仕直し、がつくりと仰向あおむいて、唇をぺろぺろと

舌で嘗なめる親仁おやじも、蹲しゃがんだり立ったりして、色気のない大欠伸おおあくび

を、ああとする茜あかねの新姐しんぞも、まんざら雨宿りばかりとは見えなか

った。が、綺麗きれいな姉あねさま様さまを待飽倦まちあくんだそうで、どやどやと横手の

壇おを下り懸けて、

「お待遠まちとおだんべいや。」

と、親仁がもつともらしい顔色かおつきして、ニヤリともしないで吐ほぎ

くと、女どもは哄どっと笑って、線香の煙の黒い、吹上げしぶぎの沫しぶぎの白い、

誰たそが彼れのような中へ、びしよびしよと入いつて行ゆく。

吃びつくり驚おどろして、這しやつら奴等、田舎ものの風かぜをする掏すり賊ぞくか、ポン引ひきか、

と思おもつた。軽かろくななつた懐ふところ中ちゆうにつけても、当節あつしは油断あぶらがならぬ。

その時分ときまで、同じ処ところにぼんやりと立たつて待まちつたのである。

## 六

早く下りよ、と段はそこきざしに階かゝを明あけて斜しやめに待まちつ。自分おれに恥はじやつて、もうその上うへは待まちつていられないままでにななつた。

端はへ出でるのささえ、後あとを慕ねがつて、紙幣さつに引摺ひきずられるよような負まけ惜おしみの外聞ぐわいぶんがあるのので、角かくの処ところへも出でないでいた。なぜか、がつか

りして、気が抜けて、その横手から下りて、路みちを廻るのも億劫おつくうでならぬので、はじめて、ふらふらと前へ出て、元の本堂前の廻廊を廻つて、欄干について、前刻さつき来がけとは勢いきおいが、からりとかわつて、中折なかおれの鏝つばも深く、面おもてを伏せて、そこを伝う風も、我ながら辿々たどたどしかつた。

トあの大提灯を、釣鐘めが目め前のまえへぶら下つたように、ぎよつとして、はつと正面つまへ魅つままれた顔を上げると、右の横手の、広前ひろまえの、片隅にに綺麗にしきぎに取つて、時ならぬ錦木ひともとが一本、そこへ植かわつた風情からかさに、四辺あたりに人もなく一人立つて、傘かさを半開まっしろき、真白まっしろな横顔を見せ、生際はえぎわを濃く、美しく目迎むかひえて莞爾にっこりした。

「沢山たんと、待たせてさ。」と馴々なれなれしく云うのが、遅くなつた意味



には取れず、さかさまうら逆に怨んで聞える。

言葉戦い合かなうまじ、と大手を拵げてむずと寄つて、

「どこにしましょう。」

「どちらへでも、あなた貴下のお宜よろしい処が可ようござんす。」

「じゃ、行く処へいらっしやい。」

「どうぞ。」

ともう、相合傘の支度らしい、片袖を胸に当てる、柄よりも姿が細ほっそりする。

丈がすらりと高島田で、並ぶと蛇目傘じやのめの下に對つい。

で、大金だいきんへ入った時は、舟崎は大胆に、自分が傘からかさを持っていた。

けれども、後で気が着くと、真打しんうちの女太夫に、恭しくうやうやもさし

かけた長柄の形で、舟崎の図は宜しくない。

通されたのが小座敷こざしきで、前刻さつき言つたその四畳半。廊下を横へ通か

よいくち

口がちよつと隠れて、気の着かぬ処ひとまに一室ある……

数寄すきに出来て、天井は低かつた。畳の青さ。床柱にも名がある

う……壁に掛けた籠かごに豌豆えんどうのふつくりと咲いた真白まっしろな花、蔓つる

を短かく投込みに活いけたのが、窓明りに明あかるく灯を点ともしたように見

えて、桃の花より一層ほんのりと部屋も暖い。

用を聞いて、円鬘まげに結いつた女中が、しとやかに扉ひらきを閉めて去いつ

たあとで、舟崎は途中も汗ばんで来たのが、またここもう籠つたので、

火鉢を前に控えながら、羽織を脱いだ。

それを取って、すらりと扱しごいて、綺麗きれいに畳たたむ。

「これは憚はばかり、いいえ、それには。」

「まあ、好きにおさせなさいまし。」

と壁の隅へ、自分の傍わきへ、小膝こひざを浮かして、すらりと遣やつて、片手ひとてで手巾ハンケチを捌さばきながら、

「ほんとうにちと暖か過ぎますわね。」

「私は、逆のぼせ上あるからなお堪たまりません。」

「陽気のせいですね。」

「いや、お前さんのためさ。」

「そんな事をおっしゃると、もつと傍そばへ。」

と火鉢をぐい、と圧おして来て、

「そのかわり働いて、ちつと開けて差上げましょう。」

と弱々と斜ななめにひねった、着流しの帯のお太鼓の結むすびめ目より低い

処ところに、ちようど、背後うしろの壁を仕切つて、細い潜くぐり窓の障子がある。

カタリ、と引くと、直ぐに囲いの庭で、敷松葉を払つたあとら

しい、露ふきの葉が芽めんだように、飛石が五六枚。

柳の枝折戸しおりど、四ツ目垣。

トその垣根へ乗越して、今フト差さ覗のぞいた女の鼻筋の通つた横

顔はすつかを斜はすつか違ちがいに、月影に映す梅ずわえの楚おおいのごとく、大なる船へさきの舳へさきがぬ

つと見える。

「まあ、可いいこと！」

と嬉あどけしそうに、なぜか仇あどけ気ない笑顔になつた。

## 七

「池があるんだわね。」

と手を支ついて、壁に着いたなりで細ほりしたおとが頤いを横にするまで下  
 から覗のぞいた、が、そこからは窮屈こつぜんで水は見えへさき  
 ばかり顕あらわれたのが、いっそ風情であつた。

カラカラと庭下駄が響く、とここよりは一段高い、上の石畳み  
 の土間を、約束の出であろう、裾すそ模も様ようの後姿で、すらりとした  
 芸者が通つた。

向うの座敷に、わやわやと人声あり。

枝折戸しおりどの外を、柳の下を、がさがさと箒ほうきを当てる、印半纏しるしばんでんの円い背せなかが、蹲うずくまって、はじめから見えていた。

それには差構さかまいなく覗いた女が、芸者の姿に、密そつと、直ぐに障子を閉めた。

向直った顔が、斜めに白い、その豌豆えんどうの花に面した時、眉を開いて、熟じつと視みた。が、瞳を返して、右手めてに高い肱掛窓ひしかけまどの、障子の閉ったままなのを屹きつと見遣みやった。

咄嗟とつさの間の艶麗あでやかな顔の働なまめきは、たとえば口紅を衝つと白粉おしろいに流して稲妻を描いたごとく、媚なまめかしく且つ鋭いもので、敵あり迫らば翡翠ひすいに化して、窓から飛んで抜けそうに見えたのである。

一帆は思わず坐り直した。

処へ、女中が膳ぜんを運んだ。

「お一ツ。」

「天気は？」

「可い塩あんばい梅あがに霽あがりました。……ちと、お熱過ぎはいたしませんか

。」

「いいえ、結構。」

「もし、貴あなた女。」

女が、もの馴なれた状さまで猪口ちよくを受けたのは驚おどろかなかつたが、一ツ

受けると、

「何うぞ、置いて去いらしつて可ようござんす。」と女中を起たたせた

のは意外である。

一帆はしばらくして陶然とうぜんとした。

「更あらためて、一杯ひとつ、お知己ちかづきに差上げましょう。」

「極きまりが悪うござんすね。」

「何なにの。そうしたお前まへさんか。」

と膝ひざをぐつたり、と頭こうべを振ふつて、

「失礼しつれいですが、お住所ところは？」

「は、提灯ちようちんよ。」

と目許めもとの微笑ほほえみ。丁ちようと、手にした猪口ぶたぐちを落おすように置くと、手ハ

巾しんではつと口くちを押おえて、自分おかしでも可笑おかしかったか、くすくす笑わらう。

「町名まちな、町名まちな、結構けいこう。」

一帆は町名と間違まちがえた。



「いいえ、提灯なの。」

「へい、提灯町。」

と、けろりと馬鹿気た目とろでいる。

また笑つて、

「そうじゃありません。私の家は提灯うちなんです。」

「どこの？ 提灯？」

「観音様の階段の上の、あの、大な提灯おおきの中が私の家うちです。」

「ええ。」と云つたが、大概察した。この上尋ねるのは無益である。

「お名は。」

「私？ 名ですか。娘……」

「娘<sup>むすめこ</sup>子さん。——成程違くない、で、お年<sup>とし</sup>紀は？」

「年は、婆さん。」

「年は婆さん、お名は娘、住所<sup>ところ</sup>は提灯の中でおいでなさる。……

はてな、いや、分りました……が、お商売は。」

と訊<sup>き</sup>いた。

後に舟崎が語つて言うよう——

いかに、大の男が手玉に取られたのが口惜<sup>くやし</sup>いといつて、親、兄、姉をこそ問わずもあれ、妙<sup>としごろ</sup>齡の娘に向つて、お商売？ はちと思切つた。

しかし、さもしいようではあるが、それには廻廊の紙幣<sup>さつ</sup>がある。その時、ちと更<sup>あらた</sup>まるようにして答えたのが、

「私は、手品をいたします。」

近頃はただ活動写真で、小屋でも寄席よせでも一向入りのない処から、座敷を勤めさして頂く。

「ちよいと嬰兒あかさんにおなり遊ばせ。」

思懸おもいけない、その御礼までに、一つ手前芸を御覧に入れる。

「お笑い遊ばしちや、厭いやですよ。」と云う。

「これは拜見！」とおおげおおげさに開き直つて、その実は嘘だ、と思つた。

すると、軽く膝を支ついて、蒲団ふとんをずらして、すらりと向うへ、

……扉ひらきの前。——此方こなたに劣さからず杯さかずきは重ねたのに、衣きぬの薰かおりも冷ひやり

した。

扇子を抜いて、畳に支ついて、頭つむりを下さげたが、がっくり、と低頭うなだれたように悄しおれて見えた。

「世渡りのためとは申しながら……前さきへ御祝儀を頂たまいたり、」  
と口籠くちごもって、

「お恥かしゆう存じます。」と何と思つたか、ほろりとした。その美しさは身に染みて、いまだ夢にも忘れぬ。

いや、そこどころか。

あの、籠かごの白い花を忘れまい。

ずっと抜くと、掌てのひらに捧たげて出て、そのまま、櫺れんじまど子窓の障子を

開けた。開ける、と中庭一面の池で、また思懸おもひかけず、船が一舳そう、隅田に浮いた鯨のごとく、池の中を切劃しきって浮く。

空は晴れて、霞が渡つて、黄金のような半輪の月が、薄りと、  
 淡い紫の羅の樹立の影を、星を鏤めた大松明のごとく、電燈と  
 ともに水に投げて、風の余波は敷妙の銀の波。

ト瞻めながら、

「は、」と声が懸る、袖を絞つて、袂を肩へ、脇明白き花一  
 片、手を這つたか、と思ふと、非ず、緑の蔓に葉を開いて、は  
 らりと船へ投げたのである。

ただ一攫みなりけるが、船の中に落つると斉しく、礫打つた  
 水の輪のように舞つて、花は、鶴の羽のごとく舳にまで咲きこぼ  
 れる。

そのときりりと、銀の無地の扇子を開いて、かざした袖の手の

しないに、ひらひらと池を招く、と澄透る水に映つて、ちらちらと揺めいたが、波を浮いたか、霞を落ちたか、その大き、やがて扇ばかりな真白な一羽の胡蝶、ふわふわと船の上に踊られて、つかず、離れず、豌豆の花に舞う。

やがて蝶が番になつた。

内は寂然とした。

芸者の姿は枝折戸を伸上つた。池を取廻わした廊下には、欄干越に、燈籠の数ほど、ずらりと並ぶ、女中の半身。

蝶は三ツになつた。影を沈めて六ツの花、巴に乱れ、卍と飛交う。

時にそよがした扇子を留めて、池を背後に肱掛窓に、疲れた

ように腰を懸ける、と同じ処に、ひじ肱をついて、あつけ呆気に取られた一  
 帆と、フト顔を合せて、恥じたる色して、扇子をそのまま、横に  
 背そむいて、胸越しに半面を蔽おおうて差俯さしうつむ向く時、すらりと投げた裳もすそ  
 を引いて、足袋の爪先を柔かに、こぼれた褌つまを寄せたのである。

フト現うつつから覚めた時、女の姿は早やなかつた。

女中に聞くと、

「お車で、たった今……」

明治四十四（一九一一）年二月





# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成<sup>4</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

2004（平成16）年3月20日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 妖術

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>